

## Teachers' Learning and Growth in Constructing Standard for Universal Design Education at a Junior High School as a Whole

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 靖 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00027946">https://doi.org/10.14945/00027946</a>

## 中学校の特別支援教育スタンダード構築の取り組み

### における教師の学びと成長

加藤 靖（藤枝市立青島中学校長／元附属島田中学校）

#### Teachers' Learning and Growth in Constructing

#### Standard for Universal Design Education at a Junior High School as a Whole

Yasushi Kato

#### 要 旨

藤枝市立H中学校では平成27年度の特別支援学級（知的）開設にあたって、ユニバーサルデザインの学校づくりに取り組んだ。「発達障害をもつ生徒にとっても参加しやすい学校は、すべての生徒にとっても参加しやすい学校である」を仮説とし、実践を重ねたものである。6年ほど前の実践であるが、本論文ではスタンダード構築の過程を改めて振り返りながら、教師の学びと成長の観点からその過程を意味づけ直してみた。

キーワード：ユニバーサルデザイン 刺激の調節 教室環境整備

#### 1 課題設定

本論文において題材とするのは、藤枝市立H中学校で特別支援学級（知的）開設（平成27年度）にあたって取り組んだ「ユニバーサルデザインの学校づくり」である。「発達障害をもつ生徒にとっても参加しやすい学校は、すべての生徒にとっても参加しやすい学校である」という全職員の共通認識の下に、全校で実践を重ねた。

6年ほど前の実践であるが、この「H中スタンダード」構築の過程を改めて振り返りながら、教師（管理職を含む）の学びと成長という観点からその過程を意味づけ直すことを本論文の課題としたい。

#### 2 H中の研究テーマと目的

平成27年度藤枝市立H中学校に特別支援学級（知的）が設立されることになった。当初、特別支援学級の生徒が安心して学校生活をおくることができる環境を整備することを考えた。学級名を「1組」とし、常に最初に意識するようにした。

「個の実態に応じた支援」を各授業で行い、それぞれの生徒の必要性に応えることをめざした。H中で大切にしているピアサポート活動で、1組の生徒もH中の諸活動に参加しやすいように計画していく、特別支援学級で有効だった手立てを通常学級にも取り入れていく

等々である。しかしながら、この発想は皆が安心して生活をするにあたっての「障壁」をいかに解消していくか、いうならば「バリアフリー」の発想である。

そうした中、東京都日野市教育委員会が作成した「通常学級での特別支援教育のスタンダード」（東京書籍）という1冊の本に出会った。

この本は「すべての生徒にとって参加しやすい学校をつくり、分かりやすい授業をする（ユニバーサルデザインの学校）」を「全ての教師が本来目指しているもの」としている。そして、その実現に向けて「通常学級における特別支援教育」で有効であった実践を「このスタンダード」としてまとめあげ、「障害をもっている子どもだけでなく、困難を感じている生徒を学校全体で包み込む」インクルーシブ教育を進める意義・手法がちりばめられている。「バリアフリー」ではなく「UD（ユニバーサルデザイン）の学校づくり」。「UDの学校づくり」＝「特別ではない支援教育」としていることに大変感銘を受けた。

H中学校の生徒は温厚で、礼儀正しい生徒が多い。生徒指導上の問題行動も多くない。その一方で通常学級にいる特別な支援の検討を要する、障害の疑われる生徒らの気になる表れが数多く見られている。集中力が続かない。じっとしていられない。こだわりが強くて周囲と協調した生活を行うことができない等々であ

る。そのうえ彼らの多くには自己肯定感の低さ、問題行動なども発生しており、様々な面での指導の難しさを感じていた。「特別支援学級」のために何かを行うのではなく、「特別支援学級」を拠点に「通常学級における特別支援教育」を積極的に推進し、H中で生活する「より多くの生徒（特別支援学級の生徒、通常学級で生活する障害のある生徒もない生徒も）」にとって参加しやすい学校（UDの学校）」を目指すことこそ、H中の実態にあっているのではないかと考えた。

そこで、平成26年12月に「インクルーシブ教育」の学習会を行い、全職員で学習を始めた。その際の資料は「インクルーシブ教育」(<http://ameblo.jp/k-project-sado/entry-11489457002.html>)

にある。さらに平成27年度教育課程では、通常学級における特別支援教育の先進的実践を行っている日野市を視察し、日野発達・教育支援センターで日野市の取り組み・考え方の説明を聞いたり、日野第三中学校で実際の現場の声を聞かせてもらったりした。その上で、研究テーマを「通常学級における特別支援教育～H中スタンダード構築の取り組み～」とし、次のような方向性の下で「通常学級における特別支援教育」に取り組みはじめた。

#### 【目指す方向性】

生徒が学校に適応するのではなく、生徒の必要に応じる学校づくり。

#### 【全職員共通認識】

発達障害をもつ生徒にとっても参加しやすい学校は、すべての生徒にとっても参加しやすい学校である。

### 3 H中の目指す「通常教室で行う特別支援教育」を「H中スタンダード」という形にする

#### (1) 日野発達支援センター及び日野市立第三中学校への視察の実施について

東京都日野市は教育委員会の中に「特別支援」の専門部署があり、大学と提携して行政主導の下、先進的な取り組みが行われている。平成19年より3年計画でハード面の充実に回り、平成21年度からはソフト面での充実を試み「ひのスタンダード」の策定を行っている。その基本的な考え方は、「特別な支援方法」ではなく、「通常学級」で日々行われている「どの子も活かされる学級経営」「どの子にも分かる授業」を精選・昇華

して日野市の学校で共有しようとしたものである。私たちの「H中スタンダード」策定にあたり、最初に学び参考にしたと考え、平成26年1月30日に教務主任、前学習部長、現学習部長の3名が日野市発達支援センター・日野第三中学校に視察し報告書にまとめた。

その概要は以下の通りである

#### ①インクルーシブ教育（包み込む教育）とは？

障害のある子、ない子、外国籍の子（すべての子）を可能な限り受け入れ、一緒に教育していこうという考え方。そのために、学校が子どもの必要に応じるという発想。そのために第一段階として「困っていることを減らす」ために環境を整備する。

発達障害のキーワードは「状況依存症」である。

☆LDは「学習の仕方」に左右される。

☆ADHDは「刺激量」に左右される。

☆自閉症スペクトラムは「分かりやすく整理されているか」に左右される。

#### ②教育におけるユニバーサルデザインの発想

「発達障害のある子にとって参加しやすい学校・分かりやすい授業は、全ての子にとっても参加しやすい学校・分かりやすい授業である」これが教育におけるUDである。

#### ③「ひのスタンダード」の取り組み（スタート時）

落ち着かなかった子どもが座れるようになった。しかし我慢して座っているだけでは拷問ではないか。必要感のある小学校は「環境整備」から取り掛かり、授業改善を行った。中学校は授業改善から取り掛かり「環境整備」の必要性に気づくようになった。「教室環境の整備」から「教師の意識改革」へと発展した。

#### ④ひのスタンダードの一例

ア 刺激量を調整：前面掲示板にカーテンをする  
前面掲示をしない

イ 場の構造化：ロッカーの整理方法を写真で示す  
提出物を出す専用の箱を用意する

ウ ルールの明確化：暗黙のルールを明示  
(清掃用具の片づけ方、教材の置き方)

#### ⑤日野第三中学校（どの子にもよりよい学習環境づくり）4つの構造化

ア 空間環境（学級における刺激の調整）

教室前面の視覚刺激の調整に加え、聴覚刺激への配慮が成されている。

- ・教室に水槽を置かない。

ポンプの音は小音ではあるが、常に騒音として刺激が加えられる。

- ・机や椅子に騒音防止対策がされている。

机や椅子の脚の下にゴム製のクッションが付いている。

イ 時間環境（学習における時間の見通しをもたせる）

- ・授業開始時に、授業の進め方を説明する。

授業全体の中で、今どこをやっているのか、最後にどうなっていればいいのか示すことになる。

ウ 学習環境（授業における適切な「組立」と「対応」）

- ・構造化した授業案の作成を行っている。

情報伝達の工夫として視覚に訴える導教材を用いて意欲を喚起したり、参加の促進の工夫として学習形態の変化を用いたりしている。

エ 人環境（温かい人間関係）

- ・助け合ったり、協力し合ったりする場面を意図的に設定しようとしている。

相手のペースに合わせたり、できるのを待ったり、手を貸したりという体験の蓄積があっはじめて「協力する」という言葉の意味が分かる。

## (2) 「H中スタンダード」について

### ①策定にあたっての基本的な考え方

日野市視察を経て、「H中スタンダード」の切り口を大きく3つに分けて考えた。

ア 教室環境の整備（刺激の調節、構造化）※

イ 人的環境の整備

ウ UD化された授業

※「刺激の調節」とは、情報過多を防ぎ授業に集中しやすくすること。「構造化」とはどこに何が、何をしたら良いかをはっきりさせること。

「H中スタンダード」を作成するにあたり、つくっただけではなく全職員で実践し、さらに研修を進めていくことが可能であることを優先した。

アの教室環境の整備は、日野市でも「優先的に行

うこと」として行っている。「人間は環境に左右される生き物」であるとともに、「H中の覚悟」を示す象徴的な取り組みになると考え、全てにおいて優先的に進めることとした。

イの人的環境の整備とは「学級における人間関係づくり」が第一に考えられる。この点については、H中は生活指導部・特別活動部・学習部の全生徒指導の機能をあげてピアサポート活動に取り組んでいる。さらに平成27年度は生徒会活動や学校行事と、学級活動における話し合い活動を連携して行い「望ましい集団づくり」に力を入れていることもあり、特別活動部を中心に進めていくことができると考えた。

H中スタンダード作成時、すぐに取りかかることができず、実践上難しく感じたことが、ウの「UD化された授業」である。これを進めていくには「UD化の必要性」を全職員が共通認識してはじめてできることである。また、研修推進部との連携が不可欠ではあるが、研修を通じて育みたい力と進めたい方針との整合性を無理に図るには取り組み初年度では時期尚早と考えた。平成27年度については「各教師による実践の積み重ねをする」とし、学習部を中心に「教室環境」を中心とした「刺激の調節」「構造化」を優先的に行うこととした。

### ②教育課程での話し合い

実際に教育課程で検討してみると、「本当にやれるの?」「本当にやってくれるのですね。」等の意見が提案した学習部から全体に投げかけられた。私たちは日頃「温かみ」のある掲示を心がけてきたため、何もないことを「無機質」で「冷たい」という受け止め方をしてしまいがちである。ちょっとしたことかもしれないが、「刺激の調節」のために提案された「前面掲示の撤廃」は教師にとって価値観の変革を求められる行為であった。また、それ以外にも「中学校でここまで丁寧にやる必要があるのか?」「中学校を一步出れば、そのような丁寧な配慮などはしてもらえないのではないのか?」「一部の子には良いかもしれないが、大部分の生徒には必要ないだろう」等々のいくつかの危惧する意見も出された。しかし現実には多くの学級に特別な支援の検討を要する生徒が在籍し、その対応に担任が苦慮していた。また、学習意欲を低下させ、担任への反抗、友人への

攻撃、反社会行動へ発展していった生徒も見られた。最終的には「発達障害をもつ生徒にとっても参加しやすい学校は、すべての生徒にとっても参加しやすい学校だろう」という全職員の共通理解に基づいて平成27年度の「通常学級における特別支援教育（主に教室環境の整備）」を「H中スタンダード」としてまとめあげた。

#### 【H中スタンダード】

##### (1) 教室掲示の統一

- ・前面には一切掲示物を貼らず、正面黒板の下にも何も貼らない
- ・前面戸棚上には何も置かない
- ・学級目標は背面に掲示する

##### (2) 教室のガラス戸棚に目隠しシートを貼る



写真1：教室前面における刺激の調節

##### (3) 机・椅子の定位置をマジックで印付けする



写真2：机の位置を印付け

昔からの手法ではあるが整頓には効果的である。

##### (4)ロッカーの片づけ方の写真サンプルを用意



写真3：ロッカーの整理整頓を視覚化

##### (5) 提出物を出しやすいように、出す場所を示す



写真4：カゴを用いて提出場所指定

##### (6) 清掃用具入れに、片づけ見本で示す



写真5：清掃用具入れの視覚化

写真を貼って視覚化することで、ラベルを貼るよりも効果的である。

- (7) 授業の板書では「学習課題は白、学習問題は黄、まとめは赤」と、すべての教科で統一する
- (8) 新しい単元の難しい言葉、読みにくい漢字には読み仮名をふる
- (9) 板書、ホワイトボード、カード等を活用して指示を視覚化する
- (10) 一文一動詞で指示を出す

#### (3) H中スタンダードの精神を生かした学習部からの提案

- 「葉中スタンダード」に基づき「定期テストの工夫」が提案された。「生徒が読みやすいテスト。書きやすい解答用紙」に留意して工夫することで、生徒がもっている力を発揮しやすくなると考えた。

その要点は以下の通りである

- ・行間を空けたり、1行の文章を短くする、フォントはゴシックにする。
- ・問題文と設問の間を明確にする。(問題文を枠で囲む。設問の番号を大きくはっきり記す。)
- ・解答欄を工夫する。(解答欄を大きく、字数制限にはマスを入れる、枠線を太く。)

(参考) 小貫他『授業のユニバーサルデザイン入門』

Web: 「ユニバーサルデザインの授業づくり～バリアを除く工夫」

#### 4 授業のUD化に向けた工夫

授業のUD化に向けた工夫の一例として、藤枝市教研の授業として2年生を対象に行われた英語科「What do we need when we are happy?」をとりあげる。

##### (1)本時の目標

- ・自分のもっている情報をコミュニケーションスキルを用いながら、班のメンバーと積極的に情報交換をすることができる。

(コミュニケーションの関心・意欲・態度)

- ・自分が幸福と感じるものとネパールの子どもたちが幸福と感じるものを比較する活動を通して、他国への視野を広げることができる。

(言語や文化についての知識・理解)

##### (2)本時の目標を達成するための手段として取り入れた、「授業のUD化のための工夫」

###### ①時間の構造化

1時間の流れを提示し、1時間の見通しをもたせる。

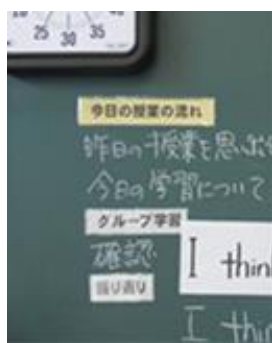


写真6：時間の構造化の例

###### ②スパイラル化

前回の授業を思いだし、本時の導入につなげる。

###### ③視覚化

ネパールの写真を提示してイメージを持たせる。その後、ネパールの「ある少女の1日」を表に示す。学習教材への興味を高め、思考に役立てる効果が期待できる。



写真7：ネパール少女の1日

###### ④共有化+スモールステップ、ルールの明確化、個別

への配慮、視覚化＝「ジグソー学習」を導入

- ア A～Dのそれぞれ難易度の異なる4つの英文（「英文のみ」「スラッシュ付」「シンプルな英文」）を用意し、班内で担当を決め（個別への配慮）、グループに分かれて意味を確認す

る。その後、班員に伝える内容をグループ別で練習。（スモールステップ）



写真8：グループ活動

イ ジグソー学習をやる際のルールの確認(例)伝える

ときは英語、メモは日本語でも良い（ルールの明確化）

ウ 班員に伝えるためにホワイトボードにメモして、視覚的に確認（視覚化）



写真9：ホワイトボードを用いたグループ活動

###### ⑤焦点化・展開の構造化

ジグソー学習を設定し、コミュニケーション活動から自分の考えをもつ学習活動につなげる。

###### ⑥個別への配慮

振り返りの最初の一文をI think で書きはじめるようにする。それ以降は英文で書ける生徒は英文に挑戦。日本語でも良いとした。

###### ⑦その他（すべてのベースとなる配慮）

ア 「分からない」と言える「間違ったり失敗したりしてもいい」雰囲気づくりをする。

イ 座席の構成「一緒に頑張っていけそうな人同士」での班づくりをする。

ウ 「教室環境を整備」することで刺激量を調整する。

###### ③板書の構造化

板書を通じて、視覚的に理解を深める。



写真10：板書の構造化

ここで行われた「授業のUD化の工夫」は「目標を達成するための手段の一つ」であり「多くの生徒に目標を達成させるための手段」として行われたのであり、「UD化のための工夫」は目的ではない。

## 5 特別支援学校高等部・水上敏子先生の講評

藤枝市教研での発表後、特別支援学校高等部の水上敏子先生に本校の取り組みを点検・評価をしていただいた。水上先生は本校の保護者でもあり、定期的な点検をお願いした。

### (1) 「成長した？適応する力を身につけてきた」

水上先生は本校生徒の小学生の頃の姿も見ている。小学生の時、今以上に多動だった姿、こだわりが強く、協調性のなかった姿を見ている。「注意深く観察しないと、症状が見えてこなくなった生徒もいる」そうである。往々に「成長した」と片づけてしまうが、実は本人の困り感は解消していなく、あくまで「集団に適応する力」を身につけたと考えるべきであり、通常学級における特別支援教育の必要性を指摘していただいた。

### (2) 「H 中スタンダード」の成果と課題

#### ①教室掲示の統一

#### ②教室のガラス戸棚に目隠しシートを貼る

##### ①②に対するコメント

- ・刺激に弱いので、刺激が無くなれば集中できるようになる。

#### ③机・椅子の定位置をマジックで印付けする

#### ④ロッカーの片づけ方の写真サンプルを用意

#### ⑤清掃用具入れに、片づけ見本で示す

##### ③④⑤に対するコメント

- ・整理されていると刺激が少ない。
- ・習慣化された行動は身につく。
- ・物が定位置にあれば生徒は落ち着く。

#### ⑥ 提出物を出しやすいうように出す場所を示す

- ・同じものには安心感がある。

#### ⑦学習課題は白、学習問題は黄、まとめは赤

#### ⑧難しい言葉、読みにくい漢字には読み仮名

#### ⑨板書、ホワイトボード、カード等で視覚化

#### ⑩一文一動詞で指示を出す

##### ⑦⑧⑨⑩に対するコメント

- ・視覚優位の特性を生かす。
- ・2つの指示は忘れてしまう。

(黒板に指示を書くと伝わりやすい)

### (3)今後の方向性

#### ①どうすればもっと効果が出るか？

- ・席の位置を考える。

(どの席が良い？周りの生徒？側面の掲示物の刺激)

#### ②学習環境 (どの子にも分かる授業にするために)

- ・学習の全体像、キーワードを予め明示
- ・集中してほしいときは声をかける。
- ・伝える指示を短く区切る。
- ・要点を繰り返し伝える。
- ・情報を書き残す。
- ・課題を一つずつ区切る。
- ・手順をわかる。

#### ③今すぐにできること

- ・発達障害の疑われる生徒の席に教師が座り、刺激物がないか確認する。
- ・机、椅子の印付け → 習慣化されたら身につく。
- ・ロッカーの整理整頓 → 持ち物が多い生徒はロッカーをふたつにすることを検討する。
- ・見本の写真は手渡すこと → 真似をすることは得意中の得意。
- ・提出物 → やってなくても提出できたことをほめる。 → 自己肯定感の低下や問題行動を回避する。
- ・自己肯定感の低下や問題行動に至らないために 褒める、認める。
- ・先生たちも褒め合う。目指すは入った瞬間にきれいな教室。
- ・日直の時に他教室のUD化の進捗状況を感じる。感じたら担任に伝える。大人も褒められ、認められれば頑張る。

## 6 H 中の実践の成果と課題

### (1)成果

「発達障害をもつ生徒にとっても参加しやすい学校は、すべての生徒にとっても参加しやすい学校だろう」との全職員による共通認識に基づいての実践をスタートしたが、学校現場での対象研究が難しいため、どの程度の効果があったのか検証するには至っていない。しかし、落ち着きのなかった生徒も集中して授業に取り組んでいる。教室環境整備だけの成果とは思えないが、この実践を始めたことにとともに、教職員の意識が大きく変わった。そのため様々な場面で行われるようになったちょっとした配慮の積み重ねも、生徒の姿に結びついているのではないかと考える。また、実践を重ねる中で、今までの教職員の取り組みの中にある「教育のUD化」のヒントも見えてきた。教職員

が日々試行錯誤してきたことの中に「UD化」につながる取り組みが数多くあり、その取り組みの視点を整理し直して、総合的に関連付けていくことで「特別ではない、特別支援教育」を構成していくことができそうだと感じられてきたことは大きな発見である。

前面掲示の撤廃は「さほどの効果はない」との意見もあることを聞いていた上で、あえてもっとも極端な方法で実践した。先述の通り、「H中の学校のUD化への覚悟」を表すものとして行った。当初、殺風景で寂しさも感じたものであったが、日々その中で生活していくと「これが当たり前」になり、逆に前面掲示のある教室に入ったりすると、乱雑さを感じるようになった。「刺激が少ない」の意味を全職員で共有できたことも大きな成果だと考える。

平成27年度は「教室環境の整備」にのみ力を入れた。以後は「教育のUD化」への意識の変化が、教職員の取り組みの変化につながり、翌年度以降次なるステップ（授業のUD化）に発展させていくことができると考えた。

## (2) 課題

「形は整ったが、ねらいの理解が進んでいない」ことがいくつか見えてきた。前面掲示を撤廃した目的は、「刺激を調節」することにある。掲示はないが余分なものが前面の視覚に入るところに残っていたり、床に印は書いてあるが、それに合わせた整頓が行われていなかったりという、なお実践化に至っていない課題が見えている。「分かっているが、できていない」ことはそれが当たり前になってしまう恐れがある。定期的に自己診断に努め、「できていること」が当たりの形にしていくことが重要であると感じた。また、今後は「授業のUD化」を進め、「すべての生徒が参加できる授業」という「特別でない通常学級で行う特別支援」を準備・前進させていく必要がある。基本的には日々の実践を価値づけし、精選・昇華することがスタートになると思われる。その際に「授業のUD化」は「手法」であって「目的」ではないことを注意・確認した上で、「生徒の必要に応じる学校」を発展させていくべきである。ただし、性急すぎる取り組みによって「形だけの模倣」に終わらないように教職員の研修を継続していく必要性も認識された。

## 7 スタンダードづくりにおける教師の学びと成長

以上、「H中スタンダード」づくりの取り組みを整理・確認してきた。最後に、その過程における教師の学びと成長の状況をとらえ直して意義づけ、本論文の結論としたい。

### (1) 全校体制とそのための教師（組織）の貢献

H中のスタンダードづくりの取り組み過程を特徴づけていた柱は、全校での共有（全校体制）への志向であり、それを実現するための教師たちの貢献と現実的な意思決定であったように思われる。

全校体制をとるべき必然性は、まず、主題としてのUD化それ自体に内在していた。教育現場において効果的と思われるUD技法は数え切れないほど存在し、UDを特色として実践している学校は全国にたくさんあるが、その多くが個々の学級担任による学級の児童生徒の実態に合わせた実践であるため、学級ごとに用いられている技法が異なることが少なくない。しかし、H中では、毎年学級編成が行われ学級担任も替わる藤枝市の中学校の現状を前に、どの教室・担任でも刺激量を揃え同一に近づけることを重視した。それゆえH中スタンダードの場合は、技法の多さではなくすべての学級で10項目が実践されることに重点を置いた。10項目の選定・実践の状況把握・教職員の共通理解のために、学習指導部が中心となって毎月の職員会議で呼びかけを行い、転入職員に対しては年度初めにマニュアルを示したり特別に研修会を行ったりしていた。さらには、5で見た通り水上先生のような専門人材からの助言も全校で共有しながら進めた（校内研修の場に専門家を招いて、「ワンポイントアドバイス」等の助言を受け共有している事例は多い：金山(2014)pp. 244-246など）。

H中にはもとより全校体制の素地・風土が存在していた。たとえば本論文中でも2に表れていたが、藤枝市の中学校で共有されているピアサポート活動について、H中では生活指導部・特別活動部・学習（指導）部の全生徒指導の機能をあげて取り組むなどしていた。主題は異なっても、教師たちの間で目標、手立てを共有する経験は積まれていたと言ってよいだろう。

さらに、全校の取り組みを可能にするための貢献や、現実的な選択・意思決定も見られた。モデルとなり得る先行例として日野市の取り組みにいち早く着目し、学習（指導）部を中心に視察に向いて材料を集め、報告・情報共有がはかられていた。しかも、H中で応用するう



えでは、日野市に見られた ア教室環境、イ人的環境、ウ授業UD化 をそのままなぞるやり方は採られなかった。イはピアサポートの土壤の効果に期待しつつ、特にアを「象徴」として優先的に重点化し、ウは実状に照らして授業改善のうでUDを目的化しないなど、選択的に軽重がつけられた。学校と教師たちの状況に応じた、戦略的とも言える現実的な判断・意思決定がなされていたのである。こうした貢献や選択による全校体制との関連で整理するならば、教師たちの学びは全校体制の取り組みを支える推進要因でもあったし、かつ、その結果・産物でもあったと言えよう。

### (2)管理職としての働きかけ

筆者は当時、H中の校長として、自らスタンダードづくりや日野市の先例に強く関心を抱き、学習（指導）部などを前面に押し立てながら、助言や支援に努めていた。しかし、管理職として敢えて独自に働きかけることが必要な局面もあった。

3の(2)でも触れ、この後の(3)でも論究するが、たとえば「刺激の調節」のために提案された様々な技法は、教員にとって価値観の変革を求められる行為であった。特に「前面掲示の撤廃」は、昭和の学校荒廃期を経験したベテラン教職員には抵抗があった。教室の前面には、校訓・学校教育目標・学級目標が掲示され、生徒に常に意識させようとしていたからである。このような教職員が共通して抱く疑問・抵抗感の根拠には、「中学校を一步出れば、そのような丁寧な配慮などはしてもらえないのではないか？ 耐える力を身につけることも大切だ」というものもあった。こうした教職経験の豊富なベテラン教職員に対して、学習指導部から理解を求めることには困難が大きいようであり、管理職からの助言・指導が必要となった。

具体的には、研修会の「校長指示事項」の中で「巷にはUDが溢れている」と題し、子どもたちを取り巻く日本社会に遍在するUDへの着目と意識改革を促した。以下のようにである。

#### 【高速道路のサービスエリアの例】

- ・トイレの蛇口に手をかざすと自動で水が出る
- ・販売店出入り口の自動ドア

これらは障害者や高齢者にとってはなくてはならない設備であるが、健常者にとっても有効であること。

#### 【道路標識の例】

- ・道路標識はすべてUDフォントで書かれている

- ・道路脇の看板、特に電話番号などゴシック体で示されている（昭和の時代は毛筆体の看板が多い）

#### 【その他の例】

- ・教師が気づかないうちに教科書のフォントが変更になっている。（教科書体→UDフォント）
- ・食品パッケージの成分表がすべてUDフォント

以上のように、時代の変化と共に世の中は変わってきており、教職員も時代の変化に柔軟に対応する能力が求められているのではないかと訴えて、意識変革と成長に向けた働きかけを試みた。

### (3)スタンダードづくりを通じた教師の変容

H中スタンダードづくりのため、研修と実践を重ねるにつれ教職員の意識が変わってきた。全員の意識の隅々まで把握できたわけではないが、たとえば生徒理解全般に関して、以下のような変容が確認できるようになった。

- ・通常学級の生徒には発達障害が疑われる生徒はいない。いたとしてもほんのわずかであると思っていた教職員が、生徒個々の特性の違いに気づきはじめ、発達障害が疑われる生徒は決して少なくない。個に応じた配慮が必要であると思うようになった。

さらに、個々の取り組みに添った成長・自己変革も見られた。顕著だったのはやはり、「象徴」と位置づけられ全校で堅く共有された「教室環境の整備（刺激の調節）」を通してだったようである。物的な環境整備とは言え、これまで（ベテラン層を中心に）自明視されてきた教師たちの価値観の一部に変革を迫るものであるため、敢えて最も極端な方法で共有したという判断・選択が功を奏したところもあろうか。以下のような変容が確認されている。

- ・「前面掲示の撤廃」された教室で過ごしているうちに当たり前のことと考えるようになってきた。他校を訪問した際に、掲示物で埋め尽くされた教室を見ると、「こんな乱雑な環境では授業に集中できないのではないか」と思う教職員が多くなった。

特別支援教育スタンダード構築という特定主題にかかわる取り組みであったが、このような教師の学びと成長の価値はより広く、深く追求されていくべきであると考えた。

#### 主要参考文献等

- 東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会「通

- 常学級での特別支援教育のスタンダード」(東京書籍、2010年)
- 月森久江「教室でできる特別支援教育のアイデア中学校編」(図書文化、2006年)
  - 小貫悟・桂聖「授業のユニバーサルデザイン入門」(東洋館出版、2014年)
  - 「インクルーシブ教育」<http://ameblo.jp/k-project-sado/entry-11489457002.html> (最終閲覧：2020年12月12日)
  - 「ユニバーサルデザインの授業づくり～バリアをなく工夫」<http://ameblo.jp/k-project-sado/entry-11590657271.html> (最終閲覧：2020年12月11日)
  - 金山康博「特別視しない特別支援教育の展開～実践4例から見るインクルージョン教育の探究～」『共栄大学研究論集』12(2014年)、pp.227-249